

No. 94

7/15 2003

目 次

新会長からのメッセージ.....	1
第 20 回年次大会のお知らせ.....	3
理事会・総会報告.....	4
第 19 回日本中東学会年次大会報告.....	9
故尾崎三雄氏蒐集アフガニスタン資料調査の報告.....	21
モンゴル中東学会の設立.....	23
公開講演会のお知らせ.....	24
『日本中東学会年報』(AJAMES) 原稿募集と 投稿規程の改正について.....	25
「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」の編纂と アンケート調査の実施について.....	27
寄贈図書.....	29
会費納入のお願い.....	31
新事務局より.....	31

新会長からのメッセージ

小杉 泰

(京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

このたび会長の任に就くにあたって、ご挨拶を申し上げます。

最初に、私が選出されましたことは、世代交代を促すと同時に役割をみなで分担するために作られた現行規定(会則第9条)が十分に機能している結果であるかと思えます。この規定をめぐっては、加藤博前会長のもとで、会員の皆

様にもお諮りしながら、前9期理事会が議論を尽くしてきました。結果としては、当該規定は現在のところ所期の目的を果たしており、当面はこのままでかまわないものと思われまます。

世代交代とならんで重要なことは、会務を理事会と会員の皆様が一同で担っていくこと(役割分担)と、そのための制度化です。今期には、理事会の直接的責任の下での編集委員会の編成、新しい委員会としての国際交流委員会の設置、従来からある「企画」担当に加えて「渉外」担当の新設などがおこなわれましたが、これからも役割分担の徹底と制度化を推進していきたいと思ひます。

特に、国際交渉は昨今急速に拡大しつつあります。中東やイスラーム世界に関して、日本を代表する学会として本会が国際的に認知されてきたことは喜ばしいことですが、それは同時に業務の大幅な拡大をもたらしています。現在は、国際交流委員会は理事会内の委員会ですが、将来的には、学会内の独立の委員会とすることが望まれます。編集委員会も過去2年にわたっていっそうの充実化をめざして拡充を図ってきましたが、今後は2つの委員会が組織的活動の2本柱となるべきかと思ひます。

「渉外」は日本学術会議や他の地域研究学会との協力などに関する業務ですが、この面でも現在、大きな動きが起こりつつあります。特に、学術会議が来年に大きく改組されると予想されていますが、この機会に、地域研究の重要性を広く社会に訴えるとともに、地域研究学会がより適切に社会貢献をすることができるよう、さまざまな働きかけをしていく必要があります。そのような動きの一つとして、「地域研究学会連絡協議会」の設立へ向けて、本学会も積極的に関わっていききたいと思ひます。

これまで地域研究は順調に発展してきましたが、すべてがよいことばかりではありません。今春、またもや中東が戦場となり、イラクに対して軍事的な攻撃がなされる事態が生じました。それに対して、中東とかかわりの深い私たちはみな人道的な観点からも心から憂慮してきたところですが、私見では、今回の事態にいたった原因の一つは悪しきグローバリズムの発現であったように思えてなりません。地球社会を真に共存的なものにしていくためには、グローバリゼーションと諸地域の豊かな発展が調和的に展開する必要があります。私自身は、そのような理想の追求が地域研究をする目的の一つであると思ひております。しかし、グローバリズムが一方向的に何かを「普遍的基準」として掲げるならば、諸地域の共存という課題は容易には実現できません。言うまでもなく、グローバリズムの悪しき側面を指摘するだけでは、問題は解決しません。地域研究の立場から、代替案の提示について真剣に思索することも必要と思われまます。このように考えると、今、地域研究の果たすべき役割はいっそう重いものになっているといわざるをえません。

もちろん、本会のような学術的団体には、それにふさわしい役割があります。

今年度は、「企画」の恒例行事として公開講演会を、高校の世界史教育にも役立つような内容でおこなうことが計画されていますが、そのような地道な活動を通じて、中東をめぐるあるべき知と認識に貢献していくよう、皆様と一っしょに歩んでいきたいと存じます。

会員の交流、大会の実施などの学会の経常活動に力を注ぐことは言うまでもありませんが、非才ながら、中東地域研究の発展のために精々努力したいと考えております。2年間にわたって、皆様のご鞭撻とご協力をお願い申し上げる次第です。

第20回年次大会のお知らせ

来年度の年次大会は、東京千代田区の明治大学駿河台キャンパスでおこなわれます。同大学では、数年前にリバティ・タワーという23階建てのモダンなビルができました。大会は、このビルの1階にある大ホール、23階の夜景の美しい食堂、各教室・会議室を使って行われます。明治大学は、東京駅から最も近い(30分以内)大学のひとつで、交通の便が誠に良く、周囲には神田の古本屋街、三省堂書店、各種店舗(飲み屋、食堂など)があり、退屈しないところです。奮ってご参加ください。

開催日時： 2004年5月8日(土)、9日(日)

開催場所： 明治大学駿河台キャンパス

〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1

実行委員会

委員長：永田雄三

事務局長：福田邦夫

委員：佐原徹哉、鳥居高、山岸智子(以上、明治大学)、白杵陽(国立民族学博物館・地域研究企画交流センター)、私市正年(上智大学)、小杉泰(京都大学)、松本弘(国際問題研究所)、三浦徹(お茶の水女子大学)

第2日目は例年通り研究発表とする予定です。研究発表の応募期間は9月1日から10月31日です。なお、その際に発表要旨(日本語400字、欧文の場合200 words程度)を付けて応募してください。

【連絡先】

日本中東学会第 20 回年次大会実行委員会事務局
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台 1-1
明治大学 福田邦夫研究室
電話 03-3296-2292
kfukuda@kisc.meiji.ac.jp

理事会・総会報告

【第 2 回理事会報告】

5 月 10 日(土)、立命館アジア太平洋大学 RCAPS 会議室において 2003 年度第 2 回理事会が開催されました。概要は以下の通りです。

出席：小杉泰会長、臼杵陽、大塚和夫、小松久男、長沢栄治、三浦徹、湯川武、
酒井啓子、林佳世子の各理事
オブザーバーとして帯谷、中道両会員（事務局）

欠席：飯塚、羽田の各理事

・特任理事として林会員（編集）、酒井会員（国際交流）、オブザーバーとして事務局より帯谷知可、中道静香両会員の理事会参加が承認された。

・小杉新会長から、集団指導体制での学会運営（理事会の強化）を引き継ぐこと、そのために会則改正を検討する必要があること、理事会の世代交代やジェンダーバランスに配慮した運営をめざすことなどを旨とする所信表明が行われた。

[議題]

1. 理事の任務分掌、監事および事務局の体制について（総会報告を参照）
2. 2003 年度事業計画について（総会報告を参照）
3. AJAMES の 2003 年度新編集計画およびバックナンバーの販売について
4. 日本における中東研究文献目録データベースの編纂・公開について
5. 日本学術会議における活動（特に地域研究学会連絡協議会設置）について
6. 国際交流委員会の設置および活動について
7. 2002 年度決算報告、2003 年度予算案
8. 会員動向（会費滞納者に対する除名措置の適用について）
9. その他（国立民族学博物館特別展「アラビアンナイトの世界（仮題）」への協力形態について、寄贈雑誌・図書の保管先について）

【日本中東学会第 19 回年次総会報告】

日時： 2003年5月10日(土)

場所： 立命館アジア太平洋大学ミレニアムホール

出席者： 51名、委任状178名、計229名(定足数126名)

富田健次会員の司会で、議長として栗田禎子会員、書記として池田有日子、松永泰行両会員、議事録署名人として太田敬子、鈴木均両会員が選出されました。理事会によって提出された以下の議案が審議され、いずれも採択されました。

1. 2002年度事業報告(三浦徹)

- ・第18回年次大会の開催(2002年5月11,12日、東京大学)
- ・第6回公開講演会「共存のイスラーム」(2002年11月2日、一橋記念講堂、科学研究費研究成果公開促進費の助成による)および特別講演会「パレスチナ・イスラエルの現状を考える」(2002年4月30日、一橋記念講堂)の開催。
- ・日本中東学会年報(AJAMES)第18号(2分冊)の編集・出版(科学研究費研究成果公開促進費の助成による)
- ・中東学会世界大会におけるパネルの組織および出版物展示(2002年9月、マインツ、国際交流基金日欧会議助成金による)
- ・アジア中東学会連合(AFMA)中国大会への参加。
- ・ニューズレターの発行(和文4回[総頁98頁]、英文1回[総頁8頁])
- ・学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報(2002年度配信72件、登録者数408名)
- ・AJAMESの海外研究機関への発送。
- ・第10期役員選挙の実施(2003年1-2月、ニューズレターNo.93参照)
- ・会員の増減：入会者46名(正会員20名、学生会員26名)、退会者12名/内物故者1名。結果2003年4月1日現在の会員数は620名(正会員491名/内海外在住24名、休会者15名、学生会員128名/内海外在住9名、休会者1名)。賛助会員は1団体(中東協力センター)
- ・その他(AJAMESバックナンバーの販売、会員データベース、「イラク問題」についての会長声明(2003年3月23日)とホームページ上の投稿欄の設置)

2. AJAMES第18号編集報告(岡野内正)

- ・第18号より量・質の向上をめざして2分冊とし、第18-1号(通常号)第18-2号(特集号Middle East Studies from East Asia)を発行した。外国語率は全体として68%で、国際的な発信という目標も達成できた。

3. 2002年度決算報告(三浦徹)および監査報告(宮治一雄) (8ページの表を参照)

- ・事務局移転は2003年度に計上。

- ・ 選挙費用の超過は有権者の増加による。
 - ・ 繰越金はトータルで 10 万円強減少しているが、WOCMES 大会や講演会などの活動の結果である。
 - ・ 宮治一雄監事より、飯塚正人監事により監査が行われ、決算につき問題はなかった旨報告された。
 - ・ (質疑) 国際交流費予算 5 万円は未使用だったのはなぜか、それにもかかわらず 2003 年 10 万円に増額計上されているのはなぜかとの質問があり、海外からの大会参加者の出迎え等のため毎年計上されているもので、昨年度は個人負担で出迎え等が行われたため未使用、2003 年度は英語による発信など新たな活動が予定されているため増額となっていることが説明された。
4. 第 10 期役員選挙報告 (三浦徹、松本弘、臼杵陽)
- ・ 三浦旧事務局長より、昨年度総会で理事の再任期限と会長選出に関する会則改正事務局案が否決されて以降の理事会における議論の経緯が説明され、現状では会長 2 期、理事 3 期までという再任のねじれの解消は難しく、今回は会則改正はせず理事会の運用でカバーしつつ役員選挙が実施されたと報告された。
 - ・ 理事選挙の結果はニューズレター No. 93 に記載の通り。この経緯について間違いのない旨、松本選挙管理委員が確認した。
 - ・ 臼杵陽新事務局長より、高階美行、江川ひかり両会員を監事の候補、林佳世子、酒井啓子会員をそれぞれ編集、国際交流担当の特任理事の候補としたい旨報告があり、総会の承認が求められた。
- (質疑) 選挙規則上、選出された人のみが結果として公表されるべきで、辞退者の姓名を公表すべきではないとの意見が出され、理事会で検討することとなった。
5. 理事の任務分掌と新事務局について (臼杵陽)
- ・ 第 10 期の理事の任務分掌は以下の通り。(*印は特任理事)
 - 会長：小杉泰
 - 事務局長：臼杵陽
 - AJAMES 編集委員会：長沢栄治、林佳世子*
 - 国際交流委員会：三浦徹、羽田正、酒井啓子*
 - 渉外：湯川武、大塚和夫
 - 企画：小松久男、飯塚正人
 - ・ 新事務局は地域研究企画交流センター (国立民族学博物館) に置かれる。

6. 2003 年度事業計画一般について

臼杵事務局長から概要説明の後、必要に応じて各担当理事から報告が行われた。

- ・ 第 19 回年次大会の開催(2003 年 5 月 10, 11 日、立命館アジア太平洋大学)
- ・ 国際交流委員会の設置(三浦徹): 今年度より国際交流委員会が設置された。初年度は AJAMES への海外からの投稿促進などのサポート、英語情報の発信強化などの活動を中心に行う。モンゴル中東学会が設立され、今後の協力の方法を検討する。
- ・ 「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」の編纂・公開(三浦徹): 科学研究費研究成果公開促進費による 310 万円の助成が認められたので、維持・アップデートを学会の活動として行う。会員にアンケート調査により研究業績の自己申告を求める。
- ・ 日本学術会議における活動、とくに地域研究学会連絡協議会の設置について(大塚和夫): 日本学術会議 19 期が始まったが、法人化に伴い 19 期途中に予定されている組織改変により、科研費細目に新たに採用された「地域研究」分野の審査母体を日本学術振興会に推薦する機能がなくなることが懸念される。これに関連して、アメリカ学会、日本カナダ学会と共に、日本中東学会は地域研究学会連絡協議会設置を呼びかけることとした。
- ・ 第 7 回公開講演会「世界史のなかのイスラーム」の開催(2003 年 11 月 1 日、一橋記念講堂、科学研究費研究成果公開促進費の助成による)(小松久男): 会員からのアイデアを募集中。
- ・ 日本中東学会年報 (AJAMES) 第 19 号 (2 分冊、春・秋の 2 回刊) の編集・出版 (科学研究費研究成果公開促進費の助成による)(長沢栄治): 長沢理事が編集委員長を務める。今後、各号に英語による小特集を設け、第 19-1 号では「比較史の中のアジア」が予定されている。日本における中東研究の成果も積極的に海外に紹介していく方針。投稿規程の見直しを行う。
- ・ ニュースレターの発行 (年数回)。
- ・ 学会ホームページおよび会員メーリングリストによる広報。
- ・ AJAMES の海外研究機関への普及の促進。

7. 2003 年度予算案 (臼杵陽) (次ページの表を参照)

- ・ 出版、公開講演会、データベースについては科学研究費補助金による収入がある。
- ・ 事務局費は昨年度並み。
- ・ 事業費は、AJAMES 欧文校閲費、同印刷製本費、国際交流費が増額計上、AJAMES 海外発送費が減額計上となっている。

小杉泰新会長からの挨拶があり、以上をもって総会は閉会されました。

2002年度決算

収入	02年度予算	02年度決算
2001年度よりの繰越金	3,363,300	3,363,300
年会費	5,942,000	4,099,000
正・学生会員	5,892,000	4,057,000
1996年度以前未納分	0	0
1997年度分	16,000	0
1998年度分	40,000	0
1999年度分	96,000	16,000
2000年度分	216,000	36,000
2001年度分	364,000	116,000
2002年度分	1,204,000	885,000
2003年度分	3,956,000	2,908,000
2004年度以降分		96,000
賛助会員	50,000	50,000
会費払戻(物助者)	0	-8,000
その他	1,020,300	1,003,270
科研費出版助成金	800,000	800,009
利子	300	31
AJAMES販売代金	200,000	172,040
海外郵送費実費	20,000	10,530
その他	0	20,660
収入合計	10,325,600	8,465,570

公開講演会科研費	520,000	520,001
WOCMES国際交流基金助月	2,700,000	2,609,725

2003年度への繰越金内訳	3,257,520
郵便振替口座(2002/3/31現在)	1,916,131
三井住友銀行口座(2003/3/31現在)	1,112,381
現金	229,008

2003年度予算

収入	03年度予算	02年度予算
2001年度よりの繰越金		3,363,300
2002年度よりの繰越金	3,257,520	
年会費	6,726,000	5,942,000
正・学生会員	6,676,000	5,892,000
1996年度以前未納分	0	0
1997年度分	16,000	16,000
1998年度分	40,000	40,000
1999年度分	80,000	96,000
2000年度分	180,000	216,000
2001年度分	240,000	364,000
2002年度分	516,000	1,204,000
2003年度分	1,356,000	3,956,000
2004年度分	4,248,000	0
賛助会員	50,000	50,000
その他	1,390,100	1,020,300
科研費出版助成金	1,100,000	800,000
利子	100	300
AJAMES販売代金	200,000	200,000
海外郵送費実費	20,000	20,000
AJAMES広告費	70,000	0
収入合計	11,373,620	10,325,600

公開講演会科研費	550,000
中東研究文献DB科研費	3,100,000

支出	02年度予算	02年度決算
事務局費	1,360,000	964,256
アルバイト謝金	950,000	802,590
通信費	50,000	29,200
消耗品費	100,000	46,480
会議費	100,000	23,066
交通費	100,000	57,460
振込手数料	10,000	5,460
事務局移転費	50,000	0
事業費	4,700,000	4,243,794
大会開催費	300,000	300,000
AJAMES18号編集費	250,000	165,550
欧文校閲費	200,000	183,389
同号(本巻・別冊)印刷費	2,200,000	2,169,615
編集委員会交通費	100,000	25,420
ニュースレター発行費	300,000	342,510
AJAMES/NL発送費	550,000	524,460
AJAMES海外発送費	150,000	63,530
選挙費用	50,000	51,646
国際交流費	50,000	0
インターネット広報費	200,000	141,360
WOCMES	200,000	145,732
AFMA中国大会	100,000	57,305
公開講演会広報等	50,000	73,277
2003年度への繰越金	4,265,600	3,257,520
支出合計	10,325,600	8,465,570

5,208,050

第 19 回日本中東学会年次大会報告

【大会プログラム】

5月10日(土) 公開講座・総会 (立命館アジア太平洋大学ミレニアムホール)

12:30 受付開始

13:30 主催者および来賓挨拶

13:40-16:00 日本中東学会・APU 共催公開講座「イラク問題を考える」

講師：酒井啓子 (日本貿易振興会アジア経済研究所)

定森大治 (朝日新聞)

コメンテーター：武藤幸治 (立命館アジア太平洋大学)

Michael Penn (北九州市立大学)

16:15-17:15 総会

18:30- 懇親会 (湯布院ハイツ)

5月11日(日) 研究発表

午前の部(9:30～12:10)

第 1 部会 (教室棟 F108)

今野毅 (北海道大学・院) 15～16 世紀の「ティマール制」史料におけるミュシユテレク・ティマール

黛秋津 (東京大学・院) 18 世紀末-19 世紀初頭オスマン・ヨーロッパ関係の中のワラキア・モルドヴァ問題 露土関係を中心に

秋葉淳 (日本学術振興会) オスマン朝シャリーア法廷研究上の諸問題

小松香織 (筑波大学) オスマン帝国末期の海運と黒海沿岸民 「トルコ海運」史料の分析を通して

第 2 部会 (教室棟 F109)

後藤絵美 (東京大学・院) 「フィットナ」と女性 中世期のクルアーン注釈書にみるヴェール着用の理由

嶺崎寛子 (お茶の水女子大学・院) ファトワーにみる現代エジプトのジェンダー規範と法意識

阿部るり (ロンドン大学・院) トルコ南東アナトリアにおける都市化と女性：ガジアンテップ市のケナール・マハレから

Zahra Taheri (東京外国語大学) The Depiction of Women in Persian Literature

第 3 部会 (教室棟 F110)

Arezoo Fakhrejehani (東京工業大学) イランのアゼルバイジャン地方におけるア

イデンティティと国家認識 オーラルヒストリで見る近現代史

Michael Penn (北九州市立大学) First Contact: The Story of the "Zadkia"

中村妙子 (お茶の水女子大学・院) 12 世紀前半のアレppoの政権交替とジャジーラ

長谷部史彦 (慶應義塾大学) 15 世紀中葉カイロの食糧騒動

第4部会 (教室棟 F111)

横田貴之 (京都大学・院) 現代エジプトにおけるイスラーム政党 ワサト党を巡る一考察

吉川卓郎 (立命館大学・院) エジプト紙における湾岸危機イスラーム論争再考: ムスリム同胞団の主張を中心に

新井一寛 (京都大学・院) 現代エジプトにおけるタリーカ(スーフィー教団)の形態 ジャーズーリーヤ・シャーズィリーヤの事例を通して

加藤博・Ali El-Shazly・岩崎えり奈 (一橋大学) 大カイロへのマイグレーション 世帯調査と GIS の接合の試み

第5部会 (教室棟 F112)

辻上奈美江 (神戸大学・院) サウディアラビアにおけるザカートの役割の変化

子島進 (京都大学) ワクフと社会開発 パキスタン・ハムダルド財団の事例から

鈴木均 (アジア経済研究所) ルースター・シャフル再考

森田豊子 (神戸大学・院) イラン学校教育の中のイスラム

第6部会 (教室棟 F205)

武石礼司 (富士通総研) 中東経済、発展の課題

夏目美詠子 (日本貿易振興会) トルコ・エネルギー政策

細井長 (立命館大学・院) グローバル経済下におけるドバイの開発戦略

柏木健一 (筑波大学) 安定化・構造調整政策下のエジプトにおける農業の成長と労働力の吸収

午後の部 (13:10 ~ 16:00)

第7部会 (教室棟 F108)

岩永尚子 (津田塾大学・国際関係研究所) ヨルダンにおける近代教育の拡大過程に関する考察: アンケート調査を中心に

大川真由子 (東京都立大学・院) 東アフリカおよびオマーンにおける「ザンジバリー」ネットワーク

大庭竜太 (京都大学・院) 「クルド系ヌルジュ」の思想と活動 現地調査の中間報告として

第8部会 (教室棟 F109)

中町信孝 (東京大学・院) パフリー・マムルーク期史料としてのバドルッディーン・アル=アイニーの年代記

Salah Hannachi (Ambassador of Tunisia to Japan) Hassine Basha's Letter to General Consul Amos Perry on the Question of Slavery and its Abolition in Tunisia

亀谷学 (北海道大学・院) ダーラーギルドにおけるアラブ・サーサーン貨の発行について

Ali El-Shazly (一橋大学) The Image of the European Quarter in Cairo

第9部会 (教室棟 F110)

小島宏 (国立社会保障・人口問題研究所) 中央アジアにおける環境汚染と母子の健康

Dae Sung Kim (Hankuk University of Foreign Studies, Korea) Hope and Frustration of Turkish Nations in Central Asia

Byong Joo Hah (Busan University of Foreign Studies, Korea) Korean Contact to the Islamic World in the Silla Dynasty (-10c)

第10部会 (教室棟 F111)

澤井充生 (東京都立大学・院) イスラーム聖者の墓をめぐるポリティクス 中国寧夏回族自治区銀川市フイーヤ派の事例から

Abdullah Mohammed (Kuwait University) Islam and the New International Order: A New Realist Perspective

第11部会 (教室棟 F112)

クロダ・ヤスマサ (University of Hawaii, 早稲田大学) 対イラク戦争をめぐるアメリカと日本の政治

佐藤道雄 (広島大学非常勤講師) アラビア語における 'inna-hu/'anna-hu に後続する VS 構文について

* Mahdi Arar 氏 (Birzeit 大学) による研究発表は中止

【主催校から】

第19回年次大会を振り返って

実行委員長 武藤 幸治

(立命館アジア太平洋大学)

大都市から遠く離れた別府での開催に140名を超える参加者を数えたのは湯の町の魅力だったのでしょうか。慣れないことなので無事に運営できるかどうか実はビクビクものでしたが、行き届かぬお世話にもかかわらず皆さんが喜んでお帰りになるのを見送りながら、ホッとしているところです。

今回大会をお引き受けした立命館アジア太平洋大学はこの春で4年を迎えやっと一人前になりました。この時期に中東学会の大会を当地で開催出来たことは学校にとって名誉なことです。私自身にとっても、とかく東・東南アジアに関心が向かい勝ちな研究者学生を目を中東地域に向かせる好機にもなりました。

その意味でも初日、当校と共同で公開講座「イラク問題を考える」開催して、別府の市民、学生に聞いてもらったのは意義深いものでありました。朝日新聞の論説委員は定森大治さんはアメリカのイラク攻撃の背後には3つの陰謀説があると、アジア研究所の酒井啓子さんはサダムという重石の取れたイラクは統一が保てるのか、米国は何をしようとしているのか、そして何が出来るのかについて興味深い報告をされました。その後北九州市立大学のマイケル・ペンさんと私が加わったパネルディスカッションと続いたのですが、フロアからの質問が続出、テーマに対する関心の高さを感じました。

総会が済むと待望の(?)湯布院での懇親会を用意しました。会場に着くなり名物露天風呂に浸かる隙もなく、レセプションです。なんと言ってもチュニジア大使サラハ・ハンナシさん差し入れのチュニジアワインとチュニジア焼酎が座を盛り上げました。

2日目はこれまた当地名物の霧の歓迎です。バスの到着遅れも杞憂に終わり、午前と午後合わせて11分科会に分かれた研究発表も予定通り進行できました。今年は研究発表申し込みが40件を超えるほどで中東研究の広がりを強く感じさせました。

最後に私を支えてくれた実行委員の皆さんと遠くまで足を運んでくれた会員の皆さんにお礼を申し上げます。

【公開講座】 「イラク問題を考える」

本シンポジウムは日本中東学会第19回年次大会の冒頭を飾るにふさわしい、時宜にかなった有意義なシンポジウムであった。酒井啓子氏(アジア経済研究所)と定森大治氏(朝日新聞論説委員)の両氏が講演を行い、それに対してマイケル・ペン氏(北九州市立大学)と武藤幸治氏(APU)がコメントを加え、臼杵が司会を務めるというかたちで進められた。

酒井氏はイラク戦争後のイラク国内情勢に関して概観して、海外組と国内組の対抗関係が今後のイラク復興に与える政治的な影響に触れ、イラク国軍がほとんど抵抗らしい抵抗を示さなかった事実に対してきわめて慎重ではあるが米国の陰謀論を示唆した。

定森氏は、何のためのイラク戦争だったのかの説明として「陰謀論」があることを指摘し、次の三者による「陰謀論」を紹介してそれぞれにつき反論を加えた。すなわち、親イスラエル勢力としてのネオコン、テキサスの石油企業やそれに群がる連中、保守的キリスト教徒による反イスラム十字軍。それぞれの説明には反論が可能であり、「陰謀論」では説明がつかないと結論づけた。

コメンテーターとしてまず武藤氏が、日本とイラクの経済関係を中心にその歴史を説明した。ナツメヤシの国のイラクのイメージから、石油ショックを機にイラクは日本の市場として重要になり、日本もイラクの復興支援に関わって

いく関係史を概観した。

ペン氏はいわゆる「ネオコン」が結集する PNAC(Project for the New American Century) の活動を中心にアメリカの対イラク政策に関して説明した。

質疑応答では、米国の一極集中に対する日本の対応、アラブの反米感情、イラクのシーア派、世俗主義あるいはナショナリズムとイスラームとの関係、フセインはどこで何をしているのか、今後のイラクの方向性、など、数多くの質問が出されたが、時間が足りなかったために十分な応答ができなかったのは残念

で あ っ た 。
(臼杵 陽)

【研究発表会場から】

第 1 部会

今野毅氏は、『ヒジュラ暦 835 年アルバニア県検地帳』を基礎史料として、複数の人物が同一の徴税権を共同で保有するミュシュテレク(共有)・ティマールに関して、ヒッセ(取り分)および軍役の具体的形態に依拠して検証された。この方式が在地有力家系の取り込みと監督などを目的として活用されていた可能性の指摘から、今後の氏の研究が、一方では基礎研究としてのティマール制研究をより掘り下げ、他方ではオスマン朝下のアルバニア地域の普遍性と特殊性とを明らかにする地方史研究として広がっていくと期待される。

黛秋津氏は、オスマン帝国と両公国との関係について、とりわけ 1774 年のキュチュク・カイナルジャ条約以降の諸条約文を検証することによって、「公」の任命問題が露土関係、さらにはフランスの介入を招く外交材料となったことを明らかにした。従来実証的研究が希薄だった領域だけに、ルーマニア語、ロシア語、オスマン語史料を駆使しての研究の発展が注目される。

秋葉淳氏は、シャリーア法廷研究に関する近年の研究動向を整理した上で、法廷台帳の作成過程および作成目的を考察することによって「テキスト」としての法廷台帳の検討を行った。氏は、複数の紛争解決(契約締結)の場の一つとしての法廷を人びとはどのように利用し、そこでどのように法が適用され、書記は法廷台帳にどう記録するのか、何が記録されるのか、すなわち法廷台帳は「現実」をどのように語るのかと問いかけた。

小松香織氏は、オスマン帝国末期の海軍と海運に従事していた人材の多くが黒海沿岸地域出身者であったことを明らかにした。氏はこれまでも海軍および海運に関する実証的研究を蓄積していることはいうまでもなく、そもそもエルトゥールル号の乗組員に黒海沿岸地方出身者が多かったことが本発表のきっかけとなった。遊牧出自のオスマンの民がいわゆる海の男としてはるばる日本にやってきたことを思うと、彼らの心性に思いを馳せずにはいられない。

黛氏および小松氏の両発表のなかで、キュチュク・カイナルジャ条約が外交

上でも、黒海交易上でも大きな転機であったことが指摘され、同条約の黒海沿岸近代史上における意義を再確認させられた。
(江川 ひかり)

第2部会

ジェンダー部会となった第2部会は、中東におけるジェンダーについて歴史、法学、社会学、文学というあい異なる諸領域からそれぞれ意欲的なアプローチがなされ、充実した部会となった。

まず、第一報告者の後藤絵美会員は、中世のクルアーン注釈書における女性のセクシュアリティに関する言説を丹念に追うことで、女性のヴェール着用の理由として預言者の時代にはなかった「フィットナ」を恐れる価値観が後の時代になって登場し、それが時代を追うごとに強化されていったことを明らかにした。イスラームのジェンダー規範における「フィットナ」については従来から論じられてきたが、その言説を歴史的に位置づけたことの意味は大きい。

次に嶺崎寛子会員が、ジェンダーやセクシュアリティが紛争トピックとなった現代エジプトのファトワーを詳細に検討し、シャリーアが現代社会のエジプト人ムスリム男女によっていかに生きられているか、そのジェンダー規範がいかなるものであり、そうした規範とムスリム男女がいかに交渉しているかについて論じた。アラビア語の一次文献資料を直接読み解くことで、本質主義的に理解されがちなイスラームにおけるジェンダーやセクシュアリティについて、その規範や言説と、ムスリムの男女によって生きられている現実の複雑な位相の一端を明らかにした。

「トルコ南東アナトリアにおける都市化と女性」をテーマに報告した阿部るり会員は、同地方ガジアンテップ市の3つのケナール・マハレ（周縁街区）を比較し、そのジェンダー規範と都市化のダイナミズムについて論じた。とくに具体的なトルコ語の単語に即して、そこに込められたケナール・マハレの女たちの生の複雑で多様な価値観について分析した部分が実に興味深かったが、前半の説明に時間をかけ過ぎたせいで十分な分析を展開できなかったのが惜しまれる。

最後の報告者である東京外国語大学のザフラ・タヘリ会員は、“The Depiction of Women in Persian Ethical Literature”と題して、Nashihat al-Muluk の文学における女性と原罪について論じた。質疑応答は休憩時間になっても続けられ、熱い議論が続いた。

個人的にはいずれも刺激的な報告ばかりで、午前中の部会にもかかわらず、第一報告から多数の聴衆を得たことは喜びである。
(岡 真理)

第3部会

第3部会ではまず、ファクレジャハーニー会員がイラン近現代史への国家・国際（政治）に焦点を当てるマクロ的歴史解釈手法では軽視されがちな、一個人の「生活史」に立脚した認識レベルの重要性を前提に、地方都市居住女性への聞き取り調査から定説的歴史理解との「ズレ」を描き出そうとした。「民衆史」観の重要性とオーラルヒストリーによる成果もある歴史学の研究状況からすれば決して耳新しくないが、同会員は巧みな日本語を駆使した意欲的な発表を行った。

続いて、マイケル・ペン会員が近代日本と中東イスラーム諸国の直接的関係の最初の事例として、1872年のザドキア号（チュニジア商船）の横浜来港を取り上げた報告を行った。第一報告と同様、時間的制約から消化不良に終わるほど数多の質問・コメントが寄せられたが、特に当該関係史上最初の事例としての意味だけでなく、法制度上の問題やジャーナリズムの対応を含め、脱亜入欧的な当時の日本の姿が鋭く浮き彫りにされた。今日の日本政府・社会の「異文化」世界との距離に大きな変化がないことを改めて痛感させる興味深い報告であった。

（吉村 慎太郎）

郎）

中村妙子氏の発表は、セルジューク朝リドワーン王の死後の政治的混乱の中、12世紀前半のアレッポにおける政権交代において、アルトゥク朝、ブルスキー一族、ザンギー朝という三つの外来政権がなぜジャジーラ地方から導入されたのかと問い、その地方からのトルコマーンの軍事力への各政権の依存度の違いを明らかにした上で、特にアルトゥク朝に注目して、その婚姻を通じた同盟政策を詳細に洗い直し、アルトゥク一族の二系列の同盟関係を明らかにして、最終的にその二系列ともザンギーの臣下になっていることを指摘し、ザンギー朝の政権確立期の状況を明らかにしたものであった。

長谷部史彦氏の発表は、マムルーク朝期エジプトの民衆運動研究の一環として、特に今回は対象をスルターン・ジャクマク治世末期（1449-52年）のカイロの物価高騰と食糧危機にしぼり、年代記の叙述を時系列的に整理して、民衆運動と政権の対応を検討して、民衆の心性や政治文化の特徴について考察したものであった。ムフタスイブを兼任したウスタダールのイブン・アル＝アシュカルをめぐる民衆感情の変化を聖者（ムウタカド）の弾圧事件との関係などに注目して動態的に把握して、アサディーの『経世済民論』の成立の背景を明らかにした。

（菊池 忠

純）

第4部会

第4部会はいずれも現代エジプトをめぐる発表であった。一番目の横山氏は、ムスリム同胞団への弾圧を背景に、同団から分かれ議会政治への参入を目指したワサト党の活動展開と基本理念の分析を行なった。インタビュー記録も含めて資料をていねいにまとめた内容であり、興味深い論点も示されたが、複雑な内実をもつ本体の同胞団との関係を必ずしも明確に示してはいないのではないが、という質問者からの意見があった。

同じくムスリム同胞団を取り上げた次の吉川氏の発表は、団内部での意見対立のために湾岸危機への対応が変化したとする既存の研究を実証的に批判しようとしたものである。質問者からは事実認識と言説分析と区別する、言説を状況の変化に細かく対応させて考察するべきである、といった助言がなされた。同胞団の地域政治システム（アラブ世界・イスラーム世界）に対する考え方など、世界認識の考察に素材を提供する重要な研究テーマである。

第三の新井氏は、特異な近代的組織形態と理念をもつ「現代的」タリーカに関して現地調査にもとづく分析を示した。質問に対する応答で示されたように、宗教的情念と近代的合理性をシャイフの人格の中で統合し、擬似家族的な共同体を形成しようとしている教団の姿は、深刻な社会問題を生みながら急激に変化している現代エジプト社会の中で、スーフイズムがもつ発展の可能性を示しているように見えた。

第四の発表は、一橋大学が日本で初めてエジプトの政府機関と公式に協定を結び実施している社会経済調査の初期的成果を紹介したものである。同大学の中国での調査をモデルにしながらも、人口移動などより社会学的な分析を重視したこの調査は、上下エジプトからの移住者の属性の相違など、従来の記述的な資料や人口センサスなどマクロな数値から得られた分析結果の確認だけではなく、新たな知見や理論的発展の成果が大いに期待される。

（長沢 栄治）

第5部会

辻上奈美江氏は、経済政策としての側面よりも、ザカートがイスラームのシンボルとしての政治的な側面を強めている点に関連して、濃密な研究報告を行った。ザカートの強制性と自発性の問題、政府ではなくウラマーの見解にも目を配る必要性など、縦横に走る活発な質疑が為された。

子島進氏は、欧米の市場原理が一層加速する時代にあって、ワクフ型の NGO が社会福祉の分野で果たす積極的役割の展望性について、パキスタンの一財団を事例に現地調査を踏まえたヴィヴィッドな研究報告を行った。質疑応答が相次ぎ時間切れとなったことが惜しまれた。

鈴木均氏は、1999年から2年間、イランに滞在し行った地方調査の実績を踏

まえた形で、この2月末にイランで実施された第2回地方議会選挙について、ルースター・シャフル（農村都市）部における追跡調査の報告を行った。首都の選挙状況とその結果に偏っていたこれまでの情報とは異なった側面を持つ貴重な報告内容であった。

森田豊子氏は、テヘラン中心域の学校でのフィールド調査を踏まえて、イスラーム教育の実態を、たとえばイスラーム色の強い私立学校が父兄たちに人気のある側面や、宗教行事の大衆受けを促進しつつある面など、イスラーム政治や教育論その他諸分野の観点に対して示唆に富む有益な内容の報告を行った。質疑の時間が充分に取れなかったことが惜しまれた。（富田 健次）

第6部会

第6部会の第1番目の発表者武石礼司氏の発表では、多様なマクロデータの分析を通し、中東経済の現状と経済発展のための課題が検討された。分析の対象となったのは、サウジアラビアをはじめとした各国の経済成長率とその低下を示す統計、各国への投資動向、貿易と経済発展、原油価格と経済成長率の相関関係、域内貿易依存度、中東諸国間の輸出入結合度などであり、それらの分析を通し経済発展のための課題が検討された。第6部会が使用した教室には、コンピューター、OHP、プロジェクターなどが備え付けの装置として設置されており近代的なハイテク教室であったが、朝一番(9時30分開始)の武石氏の報告では、装置の起動がうまくいかず予定していたOHPを使用することができず、この点が反省点となった。

2番目の夏目美詠子氏の発表では、冷戦後にトルコがアメリカとともに提唱した東西エネルギー回廊構想は、カスピ海諸国が産出する原油・天然ガスを、ロシア、イランを避けて国際市場へ出すことを狙いとしたものであったが、その後、トルコ国内のエネルギー源多角化の中で次第に重点が天然ガスに移り、しかも、ロシアやイランからも天然ガスの供給を受けるようになり当初の戦略と異なってきていること、一方で、国内でガスの供給過剰が起こったことを受けて、ヨーロッパへのガス供給計画が進んでいることが、報告された。

3番目の発表者細井長氏の報告によれば、湾岸産油国では、オイルブーム期の発展のピークを過ぎ、各国の経済には停滞も目立つようになっているが、アラブ首長国連邦のドバイは例外的に目覚ましい発展を続けている。ドバイの発展の原動力になったのは、同国が1980年代以来開発を進めてきたジェベルアラー・フリーゾーンである。細井氏は、ジェベルアラー・フリーゾーンを中心に、その他の各種フリーゾーンの設立を進めながら経済発展を目指そうとする、ドバイの開発戦略について分析し報告した。

第6部会の最後の報告者柏木健一氏の発表によれば、エジプトはアラブ世界

最大の農業部門を持ち、その経済や開発を考える場合、農業は重要な位置を占めている。柏木氏は、1980年代後半以降のマクロ経済の安定化と構造調整のなかで、農業改革プログラムの実施によって農業生産に自由競争的環境が作り出されたこと、また為替レートの改革と貿易の自由化が進んだこと、農業投資が行われ農地の新規開拓が行われたこと、などに着目し、農業・農村の成長と労働力の吸収について検討し報告した。(福田 安志)

第7部会

岩永尚子氏の報告は、発表者自身が実施したアンケート調査の結果を元に、ヨルダンにおいて、いつ、どのように近代教育が国民の間に受容され、また浸透したかを論じたものである。先行研究が少ない上に、北沢会員がコメントとして述べているように、現地で地道にアンケート調査を実施して発表に臨んでいる点は高く評価されるであろう。

大川真由子氏の報告は、約2年に及ぶオマーンでの現地調査を踏まえて、ザンジバリー（オマーンからザンジバルを含む東アフリカや中央アフリカへ移住し、後にオマーンへ戻って来た人やその子孫）が形成したネットワークの形成過程やその実態について論じたものである。研究対象自体大変に貴重な上に、研究手法としてインタビューをとっているなど、興味深い発表であった。

大庭竜太氏の報告は、前々回の本学会年次大会で発表者が行った研究発表を下地として、今回は特にヌルジュ運動（トルコにおける代表的なイスラーム復興運動の一つ）のなかでクルド・ナショナリズムを掲げる「メド・ゼフラ」の運動実態を明示しようとしたものである。トルコの諸々の状況を考慮すると、クルド系で、かつイスラーム復興運動の組織を対象に現地調査を実施すること自体大変な困難があったことが想像され、価値ある発表であったと感じた。

各発表にそれぞれ20人から30人近くの参加者があり、概ね盛況であった。またそれぞれの地域やテーマ、専攻分野などを共通にする多数の研究者の参加があり、彼等よりコメントや質問も多く出され、発表者にとっても今後の研究に繋がる有意義なものとなったのではなかろうか。(宇野 昌樹)

第8部会

Salah Hannachi 氏（駐日チュニジア大使）による報告は、英仏が奴隷制を廃して僅か8年以内に奴隷制を廃したチュニジアが、この問題について後進のアメリカ合衆国側に乞われ、その経験と英知を伝授した書簡に基づくものであった。そして、この問題に果たしたイスラームの役割に対する積極的評価もなされた。比較研究の興味深い素材を提供しただけでなく、優れて啓蒙的であり、

もっと一般市民に聴いていただきたかった内容でもあった。また、参加者を見る限り、学会を挙げての敬意も示されていたと思う。

Ali el-Shazly 氏の報告は、カイロのヨーロッパ人居住区にある建物保全のために、ヨーロッパの保険会社によって用意されたプランを分析したもの。特に、ヨーロッパ人地区と一般エジプト人居住区とのコントラストの消長に多角的側面から迫ったものであった。都市工学の成果を活用し、図像資料も有効であった。

(大稔 哲

也)

中町信孝氏の報告では、al-‘Ayni の‘Iqd al-Juman fi Ta’rikh Ahl al-Zaman をバフリー・マムルーク朝史研究に利用するための基礎作業として、各写本（直筆、マムルーク朝期、オスマン朝期）における A.H.728 年の記事の記述順を比較して、その完全版を確定することを試みている。その結果、この史料には完全版と要約版が存在し、後者が存在する原因として著者が講義用にそれを作成した可能性があるという従来と異なる説を提示している。

亀谷学氏の報告では、アラブ・サーサーン銀貨の年代銘文と名前銘文をアラビア語史料の記事と参照することで、ダーラーブギルドにおける銀貨発行状況の特殊性について考察している。ここで亀谷氏は、ムアーウィヤの名を刻んだコインが A.H.50～55 年に発行されたこと、またその原因をカリフが東方へと影響力を浸透させようと試みたためと推測し、更にこの都市が行政面でバスの監督下に置かれなかった可能性を指摘している。

(柴 泰登)

第 9 部会

この部会では、中央アジア関係の報告 2 本と古代朝鮮とイスラーム世界との交渉に関する報告 1 本の合計 3 本の報告が行われた。

小島宏氏の報告は、1990 年代後半に米国国際開発庁がカザフスタン、ウズベキスタン、キルギス 3 国で行った人口保健調査のデータをもとに、アラル海の死滅や核実験の影響による環境汚染と母子の健康との相関関係を分析しようとしたものである。パワーポイントを使って多様なデータが提示されたが、データの制約だろうか、明確な結論には至らなかったのは残念である。環境破壊という問題の大きさと複雑さを考えると、このようなデータを有効に活用するには、フィールドワークを含めた共同研究が必要だと思う。

KIM Dae Sung 氏の報告は、1917 年のロシア二月革命後のトルキスタンにおけるムスリム民族運動の展開を考察した。十月革命までめざましい展開を示したムスリム政治運動を多様な政治勢力の相関関係を軸に分析しようとしたペーパーであるが、資料はほとんど二次文献に依拠しており、新しさを認めるのは

困難であった。今後は報告者も利用した全ロシア・ムスリム大会の議事録などの精査を期待したい。

HAH Byoung Joo 氏の報告は、新羅王朝期の朝鮮とイスラーム世界との交渉を古代朝鮮のガラス製品、刀剣、装飾品、大小の彫像などの遺品から推定しようとしたものである。この報告もパワーポイントを用いて、多彩な遺品の映像を提示したが、イスラーム世界との交渉を確定する根拠としてはなお決定打に欠けるという印象をもった。個人的にはむしろ中央アジアとの関連を想起させる遺物に興味を引かれた。

このセッションは、狭義の中東を離れたテーマが集まったためだろうか、聴衆がきわめて少なかったことが残念であった。とりわけ韓国から2名の報告者を迎えていただけに、より多くの会員に聞いていただきたかったと思う。なお、パワーポイントの効果を発揮させるためには、テレビ画面ではやはり小さすぎるだろう。今後の大会のための教訓としたい。 (小松 久男)

第10部会

Due to the absence of one of the presenters from abroad, Section 10 consisted of only two presentations, one in Japanese and one in English.

Mitsuo Sawai's presentation focused on a local political struggle in Yinchuan city in Central China between factions of Khufiya Muslims. The striking point about this presentation was Sawai's attention to historiography: he based some of his study on a careful consideration of oral history and the graves of local Muslims. This approach, mixing the best features of history and anthropology, holds promise for production of original and important research on the "people without history," both in China and elsewhere. Sawai's use of video technology was also a notable feature of his presentation.

Abdullah Mohammad asserted that the New Bush doctrine is clearly aimed at the establishment of a unipolar global system in which Muslims have been designated as the enemy. He pointed to four variables that brought about this situation: a phobia regarding the Islamic Revolution in Iran; the "New Orientalism" of certain Western scholars; the "Israelization" of political Islam; and the shallow and violent interpretations of Islam offered by Bin Ladin and others. A lively discussion followed Mohammad's presentation. Modjtaba Sadria suggested that the apparent resurgence of US power should force us to reevaluate the standard interpretation of the Vietnam War and Ahmed Abdalla strongly asserted that Muslims needed to deeply reflect on the mistakes made within their own communities.

(Michael Penn)

第 11 部会

クロダ・ヤスマサ氏の発表は、同氏の最新論文をもとになされたもので、イラク戦争をめぐるアメリカの政策を中心に論じられた。そもそもアメリカという国の政策は、外交および内政にたいして、どのような立場をとってきたものなのか。この大国のトップである歴代大統領は、どのような政策を掲げてきたのか。いま現在の「イラク戦争」をめぐるアメリカの、所謂ブッシュ・ドクトリンによる政策を、アメリカというひとつの国がたどってきた歴史と政策をトレースしたうえでの、議論となった。対中東地域政策に影響力をもつユダヤ系議員や、今回のイラク戦争で絶対的な発言力を有し台頭してきたネオ・コンー派など、イラクを「攻撃する側」の事情や心理を、クロダ氏は新鮮な切り口で分析して語った。リンカーンの「より良き天使」であったアメリカが、どこへ向かっていくのか。世界警察たる立場にある大国アメリカと、中東諸国との政策の「外交」あるいは今回のような「戦争」という状況においてのぶつかり合いを、互いの国民性や歴史的推移から、斬新な論を展開された同氏の発表は、その基とされた論文の公表が期待されるところである。

佐藤道雄氏は、アラビア語新聞紙上で使用されている 'inna-hu, 'anna-hu 構文をとりあげての詳細な検証から、後続する VS 構文についての検討がなされた発表を行った。アラビア語の、こまかい文法的な問題を扱う発表であったが、フロアからも VS 構文に用いられる動詞の特徴などについての意見が活発に述べられ、アラビア語研究のレベルの高さが感じられた時間となった。また、同氏はこの問題については、「判例法」的に、アラビア語紙に著わされた事例からの研究を中心にしており、実際に使われている用法が正しいとする、生きている言語としての現代アラビア語を紹介し、古典文法学との違いを明証してみせた。書き言葉とはいえ、時代や文化の推移につれ、文法という言葉のルールも変容することがあるという例を、言語学的見地からひとつの大きな例を掲げた、アラビア語研究者にとって非常に有意義な発表であった。古典文法学に比して、現代の言語学によるアプローチという手法で、アラビア語について多角的な分析・研究がなされていた。このような時代性を帯びた、生きた現代語についての研究がさらに追究され、それが本邦におけるアラビア語研究のあらたなひとつの方向を築き、継続・発展させていくことは、中東地域を扱う本学会の重要な財産となろう。今後、この問題を含め、ネイティブの研究者との議論が期待されるテーマである。

(森高 久美子)

【日本中東学会第 19 回年次大会決算報告】

収 入	(円)	支 出	(円)
JAMES より	300,000	印刷費*	136,500
参加費	124,000	公開講座**	100,000
個人寄付	37,500	郵送費	85,000
		アルバイト代	120,000
		消耗品、看板	20,000
計	461,500	計	461,500

*プログラムおよび要旨集

** 講師謝礼 6 万円含む。また APU が同額を負担(折半)

(懇親会費は旅行会社に委託したため大会会計には計上せず)

故尾崎三雄氏蒐集アフガニスタン資料調査の報告

鈴木 均

(日本貿易振興会アジア経済研究所)

去る 4 月 29 日に加藤博氏(一橋大学経済学部)、臼杵陽氏(国立民族学博物館・地域研究企画交流センター)、河村俊江さん(一橋大学生)に同行して山口県周防の尾崎幸宣氏宅を訪問し、故尾崎三雄氏のアフガニスタン関係資料を見せて頂いた。他に徳山高校の藤村泰夫先生と地歴部の学生 3 人が立ち会った。

尾崎家では最初に心尽しの昼食を供され、ひどく恐縮した。幸宣氏は三雄氏の娘婿であり、奥さまもまた三雄氏の妻鈴子さんの妹の娘で尾崎家に養子に入ったとのことで、結局三雄氏の血は途絶えたことになる。また三雄氏のアフガニスタンからの帰国直後の様子を直接証言できる家族の方も現在では既におられない。

故尾崎三雄氏は 1902 年 11 月 6 日に山口市平川に生まれ、東京大学農学部を卒業して農商務省に入省、その後アフガニスタン政府の招聘で 3 年間アフガニスタン現地に滞在して農業指導を行ない、傍ら同国の情報収集を行なった日本のアフガニスタン地域研究のパイオニアである。1935 年 9 月 23 日に門司港を出発して 11 月 7 日に妻鈴子さんとともにアフガニスタンに入国、1938 年 9 月 19 日に同国を出てインド、イランほか欧米諸国を視察して帰国している。その後尾崎氏は 1941 年 7 月には海軍省嘱託となり、日本が太平洋戦争に突入するなかで 1943 年からは陸軍技師として食糧自給対策及指導に関わるなど、日本の対外政策に深く関係していた。戦後は山口に帰郷して農業試験場に勤めたが、その後 1985 年に亡くなるまでアフガニスタンに関しては全く口を閉ざされたと

いう。

ところが9.11同時多発テロ以後の国際社会のアフガニスタンに対する関心の高まりのなかで、尾崎氏の残された資料にも俄かに再び脚光が当たることになった。そのきっかけは山口市で開かれたアフガニスタン写真展である。

最初に幸宣氏の奥さまがその写真展でも使われた写真資料2,300枚を見せて下さった。大伸ばしにし、1枚々々キャプションが記入してある。それからテーマ別のフィールドノート類20冊ほど(アフガン産作物のスケッチ集を含む)および「アフガン通信」と書かれた封筒に入った妻鈴子さんから実父の幹太宛の書状5、60通、これらが尾崎資料の中心的部分であろう。これらの一部は福岡市の石風社から近刊とのことで、さぞ目利きの編集者がおられるのに違いない。なお戦後も続けていたというアフガン関係の新聞の切抜きは、一部を除いて三雄氏の死去後焼却処分してしまったという。

他にアフガニスタンの絨毯2枚ほど、子供の玩具(動物がクルクル回る玩具、あやつり人形2体、子供の手製うちわ2枚)、革の靴、ブルカ、男物の服、レコード数枚、渡航先で収集した切手のスクラップ帳、マッチなどを持ち帰っている。現地で写真撮影に使ったローライフレックスの二眼レフもある。

さらに戸外の物置の2階にダンボール箱6~7個ほどの雑誌(『カーボル』、『経済誌』等)、パシュトー語新聞、教科書(アフガン地理、世界地理、ペルシャ語、算術等)、若干の書籍(現地語雑本、洋書の農学専門書等)、大東亜共栄圏関係の和雑誌(『回教世界』、『新亜細亜』、『東亜研究所所報』、『大日』等)が塵にまみれて保存されていた。これらは幸い2階に置いてあったため、近くの川が氾濫した際にも難を逃れたという。

それから納屋の奥にも書棚2連分ほどの書籍があった。これを見ると、尾崎氏が習得した関心を寄せた外国語としては、英語、ペルシャ語、パシュトー語、ウルドゥー語から印度語(ヒンドゥー語)、トルコ語、アラビア語(およびラテン語)に及んだことが分かる。

これらは取り敢えず写真資料・レコード等については民博(白杵)に移管し、私文書および和雑誌・新聞等は一橋大(加藤)、地図および外国語雑誌・新聞等はアジ研(鈴木)でお預りすることになった。書籍および民俗資料は次の段階に残された。

ともあれ日本が大東亜共栄圏建設という空虚な事業に邁進し、やがて戦争に突入していった時代に、それまで日本で全く未開拓であったアフガニスタン研究に独力で情熱を傾注された尾崎氏のご苦勞はどれ程であっただろうか。同氏のお仕事を批判的に検証し継承していくことは、9.11以後の政治状況のなかでアフガニスタン研究を改めて再構築していこうとする我々研究者にとっての義務であろう。

今後は徳山高校の藤村先生ほかの皆さんとも連携し協力して、尾崎氏の残さ

れた資料を後進の者が有効に利用できる体制を整えていきたいと考えている。

モンゴル中東学会の設立

モンゴル中東学会 The Mongolian Association of the Middle East Studies (略称 MAMES) が昨年 10 月に設立されたとのニュースが、日本中東学会に届きました。概要は下記のとおりです。事務局は、商業・経営学研究所におかれ、今秋に大会を予定し、日本からの参加者を歓迎するとのこと。日本中東学会では、AFMA 加盟団体をはじめ、東アジア諸国の中東研究に携わる機関や研究者との交流を促進する方針であり、モンゴル中東学会に、AJAMES の近刊を贈り、交流を開始します。秋の大会の日程については、連絡が入り次第、学会メーリングニュースでご連絡いたします。 (三浦 徹)

* * *

Name of Association: The Mongolian Association of the Middle East Studies, MAMES

Address: MAMES Secretariat Office, c/o Institute of Commerce and Business, Flat #1 room 206, P.O. Box 404, Ulaanbaatar-48, Mongolia

Tel: 976-11-328741 **Fax:** 976-11-326748

E-mail: mames@icb.edu.mn

Founder of Association: Dr. Nyamzagd Sukhragchaa, Professor

The MAMES was founded with 23 Members on October 29, 2002. The rule of the Mongolian Association of the Middle East Studies was confirmed on this general meeting. President of the Association was elected from among the 7 directors who were elected from among regular members of the association by voting of the first general meeting. The objectives of the Association are to promote Middle East Studies within a framework of area studies and to support the research and academic cooperation among members of MAMES. The MAMES has the purposes to develop and strengthen with other domestic and foreign institutions, and to exchange information and knowledge, and to cooperate for research activities with related institutions. The activities of the MAMES are to organize regular lecture and discussion meeting quarter year and annual conference and special research meeting, and to support various research projects initiated by members.

第7回公開講演会「世界史のなかのイスラーム」

日本中東学会では、科学研究費補助金の助成を得て、今年度も恒例の公開講演会を開催いたします。テーマは「世界史のなかのイスラーム」で、3人の学会員の方々にそれぞれ歴史・社会、文化、現代の諸問題に関わるご講演をいただく予定です。世界史におけるイスラームの重要性は今さら指摘するまでもありませんが、「文明の衝突」や「新たな帝国主義」の危険が語られ、日本と中東との関係も先行き不透明な現在、本講演会はこれまでとはやや異なる角度から世界史とイスラームについて考える一つのきっかけとなるのではないかと思います。会場も交通の便が良い都心にあり、数百人を収容できます。会員のみなさまには奮ってご参加いただくとともに、学生・院生・同僚の方々などに本講演会の情報をお知らせいただければ幸いです。なお、今回の講演会では、特に教育現場の方々に参加を呼びかけ、学会の社会的基盤を広げていく一歩にもしたいと考えております。

(飯塚 正人)

* * *

第7回公開講演会「世界史のなかのイスラーム」

日時：2003年11月1日(土) 午後1時～5時
場所：一橋記念講堂(学術総合センタービル内)
〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋 2-1-2
(地下鉄「神保町」または「竹橋」下車)

< 講演 >

加藤博(一橋大学大学院経済学研究科教授)
「岐路に立つ文明としてのイスラーム」
榎屋友子(東京大学東洋文化研究所助教授)
「日本とイスラーム美術」
栗田禎子(千葉大学文学部助教授)
「帝国主義とイスラーム世界」

『日本中東学会年報』(AJAMES)原稿募集と投稿規定の改正について

『日本中東学会年報』(AJAMES) 第 19-2 号の原稿を募集します。提出締め切りは、9 月 30 日(火)ですが、審査の都合から、なるべく早い時期の提出をお願いします。なお、投稿を予定されている方は、7 月末までにその旨、編集委員会までご連絡下されれば幸いです。

連絡先ならびに原稿提出先は、下記のとおりです。

〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 東京大学東洋文化研究所

長沢研究室気付 日本中東学会年報編集委員会

電子メール nagasawa@ioc.u-tokyo.ac.jp

電話番号 03-5841-5887 FAX 03-3815-9565

また、今回から投稿規定を改正し、投稿に当たっては、「投稿申請票」(学会 HP からダウンロード)を原稿に添付していただくことになりました。投稿される方は、この記事の末尾に添付されている新投稿規定を注意してお読みください。

今年度から、本誌は、秋と春の 2 回の定期刊行を行うこととなり、それにともない、原則として各号に特定テーマに関する小特集を組みたいと考えています。今年度の特集テーマは、すでに決定しましたが、来年度以降の号について積極的な提案をお待ちしていますので、ご連絡ください。

同じく今年度から編集委員会メンバーが入れ替わり、理事会で承認されました。新メンバーは、以下のとおりです。

編集長：長沢栄治、副編集長：林佳世子、栗田禎子、編集委員：岡真理、岡崎桂二、岡野内正、酒井啓子、鷹木恵子、東長靖、長谷部史彦、山口昭彦、吉村慎太郎

* * *

『日本中東学会年報』投稿規程

(1992 年 5 月制定 2003 年 6 月改正)

1. 投稿資格および投稿要件

投稿者は、原則として、日本中東学会会員に限ります。投稿原稿は、国内外を問わず、未発表のものに限ります。

2. 使用言語

原則として、いかなる言語の使用も可とします。論文および研究ノートについては、本文で使用した言語とは別の言語による表題とサマリーなどを付すものとします(6.3 を参照)。なお、外国語の文章に関しては、その必要がある場合は、ネイティブの校

閱を受けてください。

3．投稿方法

投稿にあたっては、所定の投稿申請票（日本中東学会の HP より、ダウンロード可）に、氏名、所属、職位、連絡先、投稿原稿の種類など（4.を参照）の必要事項を記入し、それとともに、完成原稿を電子ファイル（テキストファイルまたはこれに変換できる任意のファイル）と任意の書式で印刷したハード・コピー2部（A4判）とを提出してください。また投稿申請票と完成原稿の電子ファイルは、電子メールにても提出してください。ただし、審査の公正を期すために、投稿者の氏名を査読者に知らせない審査方式（ブラインドジャッジ）を厳正に行うため（5.を参照）最終的に掲載が決定するまでは、原稿には、執筆者名、所属先、職位、謝辞などは、記入しないでください。それらは、掲載原稿の最終提出段階で記入していただきます。

また、アラビア文字など通常の印刷所が保持しない文字フォントを多用する原稿については、掲載が決定した最終段階で、印刷に使用できる版下を提出してください。版下の形式については、下記の 6.7 を参照してください。

4．原稿の種類と分量

- ・論文（80枚以内）
- ・研究ノート、書評論文、資料紹介（50枚以内）
- ・研究動向（20-40枚）
- ・書評（5-10枚）

枚数は日本語で1枚400字詰めとして換算してください。この枚数には、本文の他に、表題やサマリー、注、参考文献、図表なども含まれます。日本語以外の言語の場合も、ほぼ同程度の分量にしてください。例えば、英語論文の場合は、A4判1頁350語として、ほぼ40枚以内に相当します。

5．審査

投稿原稿については、編集委員会の責任において、所定の審査規定に基づいて、ブラインドジャッジ方式での採否の審査を行います。採否および掲載号などについては、書面にて通知します。審査の結果、必要に応じて、原稿の修正を求めることもあります。なお、採否にかかわらず、一度投稿された原稿については、撤回もしくは返却の要請には応じられません。

6．書式

6.1 原稿は、横書きとします。

6.2 原稿の構成は、表題、執筆者名（掲載原稿の最終提出段階で記入）、章立て、本文、注、謝辞（必要な場合）、引用文献（必要な場合）の順としてください。本文の章は、ローマ数字（I, II, III）を、節は算用数字（1, 2, 3）で示してください。節以下の小見出しは、下線またはイタリック体で示してください。また原稿の末尾に、掲載原稿を最終的に提出する段階で、執筆者の所属先と職位を、和文および英文で記入してください。

6.3 論文および研究ノートについては、1ページ目に、本文とは異なる言語による表題、執筆者名（掲載原稿の最終提出段階で記入）、章立て（章タイトルのみとし、節は載

せない)およびサマリー(長さは英語の場合で400~500語程度のもの)を入れてください。その他の種類の原稿についても、1ページ目に、本文と異なる言語での表題と執筆者名(掲載原稿の最終提出段階で記入)を入れてください。

6.4 注は、本文末に一括して、書いてください。注の番号は、パーレン付きの数字〔(1)、(2)〕を使用してください。引用文献の表記方法については、執筆者の裁量に委ねますが、本誌の既刊やIJMESなどを参考に、国内外で一般的に使用されている書式に従って、統一してください。また電子媒体を通して利用した文献や情報についても、URLアドレス、(ダウンロード年月日)を記してください。

6.5 アラビア語、ペルシア語などのラテン文字への転写方式は、執筆者の裁量に委ねますが、本誌の既刊やIJMESなどを参考に、国内外で使用されている書式に従って、統一してください。なお、転写文字は、印刷所において、原稿のハード・コピーに従って、訂正入力します。転写文字を多用する場合には、一括して置換する方が誤植や校正ミスを防げますので、掲載決定後に電子ファイルを再提出してもらうことがあります。

6.6 図表については、執筆者が作成し、掲載ページを指示してください。原則として、執筆者が作成した図表を版下としてそのまま使用します。図表には、通し番号と説明(キャプション)を付記してください。

6.7 執筆者が作成した原稿を、版下として使用して印刷する場合は、印字範囲が、天地178ミリX左右117ミリに収まるように、印字して下さい。本文文字は9ポイント(1頁34行)注は文字を11ポイント(1頁42行)を基準としますが、使用する言語やパソコンソフトに応じて、読みやすい体裁で印字してください。

7. 校正

初校についてのみ著者校正をお願いします。著者校正は、誤植などの訂正を目的とするものですから、大幅な加筆や修正はしないでください。再校以降の校正は、編集委員会の責任で行います。

8. 抜刷

原稿料は支払いませんが、論文、研究ノート、書評論文、資料紹介、研究動向の執筆者には抜刷50部を送付いたします。

「日本における中東研究文献データベース1989-2003」

の編纂とアンケート調査の実施について

ニューズレター第93号(2003/3/26発行)所載記事「ユネスコ東アジア文化研究センターの閉所について」のとおり、センター閉所に伴い、センター編集の『日本における中東・イスラーム研究文献目録』の事業に終止符が打たれました。日本中東学会では、上記文献データベース作成事業を継承するために、平

成 15 年度文部科学省科学研究費補助金（研究成果公開促進費）に「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」を申請し、このたび採択が決定いたしました。学会では、三浦徹、飯塚正人の両理事の担当のもとに、文献データベース編集係を設けて、この事業を進めることにいたします。

つきましてはデータベース作成・更新のために、会員を対象に業績のアンケート調査を実施いたします。アンケート調査は、予備調査によって作成した業績データを学会員にお送りし、情報の訂正および追加業績を同封の返信封筒でご返送いただく形式にて行ないます。基本的には郵送で実施する計画ですが、電子メールでのデータ送付・回答をご希望の方は、「電子メールでの回答希望」とタイトルを付けて（本文はお名前と所属のみで結構です）james@cc.ocha.ac.jp 宛にメールをお送りください。お礼として登録済み業績データをメールにて返信いたします。

アンケート調査の実施時期は7月初旬、回答締切は8月を予定しています。

このアンケート調査の結果は、本学会ホームページ内に「日本における中東研究文献データベース 1989-2003」のコーナーを新設し、公開する予定です。

なお、先のニューズレター93号では、『日本における中東・イスラーム研究文献目録』の東洋文庫ホームページ上での公開が3月末をもって停止されたことをお知らせいたしました。会員をはじめ関係者の要望を受け、東洋文庫ホームページでのデータベース公開が再開されましたが、この目録データは、事業が終了したため更新されません。

会員の皆様のご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

（三浦 徹）

学会への入会希望者がおられましたら、事務局宛にご連絡ください。入会案内と申込書をお送りいたします。また、学会ホームページに、学会概要と入会申し込み要項が掲載されていますので、こちらをご利用いただくと便利です。

寄贈図書

【単行本】

イラクの子どもたちを戦禍にまきこませるな委員会編『イラクの子どもたちを戦禍にまきこませるな こどものための詩集』らくだ出版、2003年。

鹿島正裕『中東戦争と米国：米国・エジプト関係史の文脈』御茶の水書房、2003

年 .

『中東諸国における政権権力基盤と市民社会：研究会中間成果報告』日本貿易振興会アジア経済研究所、2003年.

松原正毅編 『地鳴りする世界：9.11 事件を同とらえるか』 恒星出版、2002年 .

Sakai, K. ed., Social Protests and Nation-Building in the Middle East and Central Asia (IDE Development Perspective Series No.1), 2003, Chiba: IDE-JETRO.

Sayyed Mojtaba Musavi Lari, Lessons on Islamic Doctrine. Book 1: God and His Attributes, 7th edition, 2000, Qom: CIP Information.

Sayyed Mojtaba Musavi Lari, Lessons on Islamic Doctrine. Book 2: The Seal of the Prophets and His Message, 7th edition., 2000, Qom: CIP Information.

Sayyed Mojtaba Musavi Lari, Lessons on Islamic Doctrine. Book 3: Resurrection Judgment and The Hereafter, 1st edition, 1992, Qom: Foundation of Islamic Cultural Propagation in the World.

Tunisia - Japan: Cultural Dialogue, Carthage: Tunisian Academy of Sciences, Letters and Arts "Beit al-Hikma."

Usuki, A. ed., State, State Formation and Ethnic Relations in the Middle East (Nation and Ethnic Relations I; JCAS Symposium Series 5), 2001, Osaka: JCAS.

【逐次刊行物】

『アジア・アフリカ地域研究』2、2002、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 .

『岡山市立オリエント美術館研究紀要』18、2001年、岡山市立オリエント美術館 .

『現代の中東』34、2003、日本貿易振興会アジア経済研究所 .

『平成13年度第9回西アジア発掘調査報告会報告集、平成12年度第8回西アジア発掘調査報告会報告集：今よみがえるオリエント』日本西アジア考古学会、2001年 .

『平成14年度第10回西アジア発掘調査報告会報告集：今よみがえるオリエント』日本西アジア考古学会、2002年 .

Al-Bahrain Al-Thaqafia, No. 32, 2002, Manama: Al-Ayam Press, Publishing and Distribution Est.

Al-Tasmoh, No. 1, 2003, Masqat: the Ministry of Awqaf & Religious Affairs.

Bulletin of the School of Oriental and African Studies, Vol. 65, Part 1, 2, 2002, London: Cambridge University Press.

Cahiers D'études sur la Méditerranée Orientale et le Monde Turco-Iranien (CEMOTI), No. 32, 2001, Paris: Centre D' Étude et de Recherches Internationales.

İslam Araştırmaları Dergisi, Sayı 5, 6, 2001, İstanbul: İslam Araştırmaları Merkezi.

2004 年度会費納入のお願い

本会は、会費前納制をとっております。年次大会の折に 2004 年度分の会費納入の機会を設けさせていただきましたが、未納の方は本号ニュースレターに郵便振替払込用紙が同封されていますのでご利用下さい。03 年度以前の会費未納の方は、ぜひお早めにお支払いください。払込確認後、当該年度の AJAMES をお送りいたします。

新事務局より

事務局長 白杵 陽
(国立民族学博物館・地域研究企画交流センター)

このたび、国立民族学博物館・地域研究企画交流センターが日本中東学会事務局を引き受けることになりました。来年度の国立大学・大学共同利用機関の法人化を控えて、日本中東学会を含め、日本の地域研究関係の学会もさまざまなかたちで影響を被ることは必至です。そのような激動の時期に中東学会の事務局を引き受け、たいへんな責務を感じています。立命館アジア太平洋大学における総会でも確認されましたように、今後は理事会における業務の分掌体制を確立することで、理事の一人ひとりが責任を共有することで効率的な学会運営が可能になり、ひいては事務局が二年ごとに移動することも比較的容易になるのではないかと考えております。

振り返ると、地域研究企画交流センターが付置された民博と日本中東学会との関係は深いものがあります。学会の初代会長が梅棹忠夫・元民博館長でした。第四次中東戦争後に派遣された中東文化ミッションがその後、国立中東研究所構想、そして日本中東学会設立にもつながっていったわけです。遅きに失した感もありますが、やっと地域研究企画交流センターが日本中東学会の事務局を引き受けた訳で、日本における地域研究の交流を促進するという本来の役割の

一部を果たすことができたと考えております。

前事務局長の三浦徹会員から貴重な教示をいろいろと受けながら新たな事務局を立ち上げ、ようやく軌道に乗りつつあるところです。まだまだ至らない点が多々あることとは存じますが、会員の皆様のご協力を切にお願い申し上げる次第です。

最後になりましたが、地域研究企画交流センター内の事務局は次のような分担になっていますので、今後ともよろしくお願いします。事務全般に関しては中道静香会員、ニューズレター関係は帯谷知可会員、事務総括は臼杵が担当しています。

日本中東学会ニューズレター 第 94 号

発行日 2003 年 7 月 15 日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 中西印刷

日本中東学会事務局

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
国立民族学博物館
地域研究企画交流センター気付
TEL & FAX : 06-6878-8367
E メール: james@idc.minpaku.ac.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/index.html>
郵便振替口座 : 00140-0-161096
銀行口座 : 三井住友銀行渋谷支店
普通 No. 5346808